九州天皇家論
章　大八州

九州天(あま)王朝

「大八洲」は州

遙か古代、「天(あま)」と呼ばれていた古代国家が存在した。有名な天照大神はこの國に君臨していた女王である。彼女の孫、「瓊瓊杵尊(ににぎのみこと)」は「天」を出立し、「豊葦原中国」に進出し、先在の出雲王朝を滅ぼして、「天一族(あまくに)」の支配下に置いた。その子孫の神武は、「倭國」の行政区の一つ「下菟田縣」に侵入し、国見の丘で「倭國」の二人の王を破った。その後、「居勢の祝」という伊勢の神官と戦い勝利する。

そして、「犀川」をさかのぼり、「倭國」の首都での最終戦に勝利する。そして神武は「畝傍山」の東南の丘に宮を建て、国家の樹立を宣言した。神武の「倭(やまと)の国」とも云うべき新国家の誕生であった。

これが神武建国の歴史である。神武のルーツは『記紀』の記憶の及ばない遙か古代にさかのぼる。だが、その足取りが明快な史実が存在する。「州産み」である。「州産み」によって「大八洲」が作られた。「大八洲」とは何を意味するのか。また「大八洲」はどこに存在したのか。

私たちは、まず、この「大八洲」発見の旅にでかけよう。

> 是に天(あま)つ神諸(もろもろ)の命(みこと)以ちて、伊邪那岐命、伊邪那美命、二柱の神に、「是(こ)の多陀用弊流(ただよへる)国を修(おさ)め理(つく)り固め成(な)せ。」と詔(の)りて、天(あめ)の沼矛(ぬぼこ)を賜(たま)ひて、言依(ことよ)さし賜ひき。故(かれ)、二柱の神、天(あめ)の浮橋(うきはし)に立たして、其の沼矛を指し下ろして畫(か)きたまへば、鹽許々袁々呂々邇(しおこをろこをろに)畫(か)き鳴(な)して引き上げたまふ時、其の矛の末(さき)より垂(しただ)り落つる鹽、累(かさ)なり積(つ)もりて島と成りき。是れ淤能碁呂(おのごろ)島なり。
>
> 『古事記』上巻　1　国土の修理固成

有名な「州生み」神話の冒頭である。伊邪那岐命、伊邪那美命は「天の沼矛」を「天つ神」より授かり、その矛によって「州生み」は成し遂げられた。

古事記・大八島は全て「島」である

(1) 如此(かく)言ひ竟へて御合(みあい)して、生める子は、淡道之穂之狭別(あわじのほのさわけの)島。
(2) 次に伊予之二名(いよのふたなの)島を生みき。此の島は、身(み)一つにして面(おも)四つ有り。面毎(おもごと)に名有り。故(かれ)、伊予(いよの)國は愛比売(えひめ)と謂ひ、讃岐(さぬきの)國は飯依比古(いひよりひこ)と謂ひ、粟(あわの)國は大宣都比売(おほげつひめ)と謂ひ、土左(とさの)國は建依別(たけよりわけ)と謂ふ。
(3) 次に隠岐之三子(おきのみつごの)島を生みき。亦の名は天之忍許呂別(あめのおしころわけ)。
(4) 次に筑紫(つくしの)島を生みき。この島も亦、身一つにして面四つ有り。面毎に名有り。故、筑紫國は白日別(しらひわけ)と謂ひ、豊(とよ)國は豊日別(とよひわけ)と謂ひ、肥(ひの)國は建日向日久士泥別(たけひむかひとよくじひぬわけ)と謂ひ、熊曾(くまその)國は建日別(たけひわけ)と謂ふ。
(5) 次に伊伎(いきの)島を生みき。亦の名は天比登都柱(あめひとつばしら)と謂ふ。
(6) 次に津島(つしま)を生みき。亦の名は天之狭手依比売(あめのさでよりひめ)と謂ふ。
(7) 次に佐渡(さどの)島を生みき。

(8)次に大倭豊秋津(おおやまととよあきづ)島を生みき。亦の名は天御虚空豊秋津根別(あまつみそらとよあきづねわけ)と謂ふ。故(かれ)、此の八島(やしま)を先に生めるに因(よ)りて、大八島國(おおやしまぐに)と謂ふ。　　『古事記』上巻　3　大八島國の生成

「大八洲」は、通常、次のように比定されている。

淡道之穂之狭別島‥‥‥‥‥‥淡路島
伊予之二名嶋‥‥‥‥‥‥‥‥四国
隠伎之三子島‥‥‥‥‥‥‥‥隠岐
筑紫島‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥九州
伊伎島‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥壱岐
津島‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥対馬
佐渡島‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥佐渡
大倭豊秋津島‥‥‥‥‥‥‥‥本州

現代比定の問題点

この比定が合理的、理性的であるとは云えない。問題点をあげてみよう。

(1)　「州生み」とは国を造ったという説話で、島を造ったのではない。むろん人間に島は造れない。「島を生みき」という実体は「島に國を造った」ということである。それぞれの島に国が造られた。この国とは弥生国家である。弥生国家とは小さな弥生式集落である。
「州生み」は「島生み」或いは「国生み」とも書かれるが、島や州に小さな弥生集落を造った史実である。故に上記のように日本列島の各島に比定されている。しかし、島とはいえ「本州」「九州」「四国」は日常の生活感覚では島とは云えない。私は今大阪に住んでいるが、「島に住んでいる」という実感はない。
伊邪那岐命、伊邪那美命が「本州」を島と認識していたとは考えられない。「州生み」或いは「島生み」或いは「国生み」は嶋に小さな弥生国家を造ったということである。そしてその嶋とは通常の感覚で嶋である。

(2)　「州生み」の島は淡路島や対馬や佐渡のように現在も海上に浮かぶ島であるかもしれない。しかし、もはや、現代では「島」ではないかもしれない。
大阪府の東北部に門真市という市がある。市には「二島」「三島」「稗島」「島頭」など島が付く地名が存在する。現在はそこは大阪平野のど真ん中であるから、むろん「島」ではない。しかし、このあたりはかって「河内灘」「河内湖」と言われた所である。その灘(湖)に浮かぶ島だったゆえにこのような地名が残っているのである。島根半島もかっては島だったと云う。出雲國風土記はそのことを伝えている。

杵築の郷、郡家の西北のかた二八里六十歩なり。八束水臣津野命の国引き給ひし後、天の下造らしし大神の宮を造り奉らむとして、諸の皇神等、宮処に参集ひて、杵築きたまひき。故、寸付といふ。

古代、島根半島は島だった。その島を引き寄せて国を大きくしたという説話である。古代人は島根半島はかっては島だったと認識していた。
「州生み」の島は、当時、島で、現在もまた島であるという前提で比定されている。しかし、この前提は妥当であるとはいえないであろう。伊邪那岐命、伊邪那美命の時代には島であったが、現在ではもはや島とは言えない地勢(半島)であることも考えられる。また、「島生み」を「州生み」とも表記しているように、島と本土の間の「中洲」に弥生国家を建国したと考えることもできる。当時の地勢は普通の地図ではなかなか判断が難しい。しかし、インターネット地図は古代の地勢を想起させてくれる。
では、インターネットで出雲國風土記の「國引き」説話が伝える島根半島を見てみよう。かっては島だったという島根半島を航空写真でみると島影が浮かぶ。島根半島と本土との間に「中洲」が形成されて地続きとなり、半島となった。太古は海に浮かぶ島だった。

「国生み」神話はまた「州産み」神話と書かれる。この表記から考えると、「州産み」とは「本土」と「島」の間の「中洲」に弥生集落が形成されたと想定することもできるであろう。国生みの「島（州）」は現在もなお海上に浮かぶ孤島である必要性はない。

(3)　伊邪那岐命、伊邪那美命の國生み神話は銅矛圏の物語である。青銅器分布は古代西日本を大きく二つの文明圏に分ける。

広形銅矛圏・・・・・・・・・・・・・・・北九州と四国西南部
銅鐸圏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・広島以東の中国地方と近畿

伊弉諾の「州生み」は銅矛圏で、兵庫県・淡路島は銅鐸圏である。兵庫県淡路島比定は古代青銅器分布からみて矛盾する。合理的な理解に立てば、「州生み」は北九州か四国西南部が妥当となろう。

(4)　「州生み」に順序がある。古事記の「州生み」の順序は次の通りである。

1番目　淡道之穂之狭別島
2番目　伊予之二名嶋
3番目　隠伎之三子島
4番目　筑紫島
5番目　伊伎島
6番目　津島
7番目　佐度島
8番目　大倭豊秋津島

通説に従って日本地図上で順序をつけてみよう。一見して、「大倭豊秋津島」が本州に比定されているのはいかに考えても理性的とはいえないが、順序を記入すると、下図のようになる。

さて、日本地図に記されたこの「州生み」の順序を見て、あなたはどう思われますか。ここに順序と云えるものがあるとは言えない。一番目の「州産み」は「淡路島」である。二番目は「伊豫」である。ここまでは妥当と言える。しかし、三番目の「州産み」は「隠岐」である。では何故、「伊豫」から「隠岐」に飛ぶのか。ここには順序がない。仮に順序が、「淡路島」－「伊豫」－「筑紫」－「壱岐」－「対馬」－「隠岐」－「佐渡」であれば、それなりに順序がある。しかし、現代の日本地図上で見る「州生み」には順序がない。物事には全て順序があるように、本来の「州生み」にも順序があったと考えるべきであろう。

従来の研究方法の限界

従来の比定は不合理であるにも関わらず、研究は進んでいない。しかし、それには歴史的な限界があったと思われる。限界の一つは研究方法である。もう一つは地図である。

まず、研究方法としては現代地名から離れることができていない。現在、「筑紫島」「伊予之二名島」「大倭豊秋津島」という名の島は存在しないが、しかし、「淡路島」「佐渡島」「壱岐」「対馬」「隠岐」は存在する。通常の「大八洲」比定はこれらの島々から始まる。「州生み」がこれらの島々であると比定してなんら疑問の余地はないといったところであろう。

「国生みの淡路島とは兵庫県淡路島だ。兵庫県淡路島には伊弉諾を祀った大きな神社も存在するではないか。」

誰もがこのように考えている。他に「淡路島」という名前の島は存在しない。「州生み」の「淡道之穂之狭別島」とは兵庫県淡路島で決まりだ。

しかし、小さな疑問であるが、兵庫県淡路島は「銅鐸圏」である。州生み神話は「銅矛圏」の物語である。また「島産み」は「州産み」とも書かれている。現在の「淡路嶋」には「國産み」が「州産み」とも書かれた理由

がない。「州」とは本島とすぐ近くの島の間にできた中州の意味である。そこは人が暮らしやすい。ゆえに集落が作られた。現在の「淡路嶋」と本州の間には「州」はない。島根半島のように「島」と「本土」の間に国を作ったという「州産み」は現在の淡路嶋では当てはまらない。

「州生み」の本来の島はどこか。説話と地図を参考にして探していかなければならないが、地図に関しては大きな飛躍を遂げた。インターネット地図の登場である。この地図は日本列島全体から一軒一軒の家まで見ることができる。遙か上空から見たり、個人の家の屋根を真上からも見たりすることができる。まさに「鳥眼」を手に入れた。しかし、鳥は国境を見ることはできないし、地名も島の名前も見ることはできないが、インターネット地図ではこれらの全てを見ることができる。現代のスーパー鳥眼・インターネット地図を手に入れたことによって「州生み」物語は「天上」から「地上」に降りて、人間の史実として蘇った。

また、特定には現地情報が必要である。その候補地をひとつひとつ訪ねて歩くなどは普通の生活者にできることではない。また、そこを訪れたからといって、突然の訪問者が現地の伝承や遺跡を残らず見たり、聞いたりできるなどということもほぼ不可能である。

現地の生活者ほどその地の歴史に精通している人はいない。その点、私たちは現地に居住する方が作られた「ホームページ」を拝見させていただくことができる。これらは何よりの現地情報である。何年、何十年とかけて作成された現地のHPを私たちは見せていただくことができるのであるから、これほど有り難いことはない。

大八洲建国物語は現代を待ち望んでいた。現代に至って初めて超人の物語は普通の人間の物語として私たちの前に現れることになった。